慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ディドロの『ラ・カルリエール夫人』を読む
Sub Title	Lire Madome de La Carlière, de Diderot
Author	鷲見, 洋一(Sumi, Yoichi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1986
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.48, (1986. 3) ,p.147- 125
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00480001-0121

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ディドロの『ラ・カルリエール夫人』を読む

鷲見洋一

ディドロが1770年代のはじめに書いた三つの作品，すなわち『これは作り話ではない』*Ceci n'est pas un conte*,『ラ・カルリエール夫人』*Madame de la Carlière*, および『ブーガンヴィル航海記補遺』*Supplément au voyage de Bougainville* が，形式・内容ともに分かちがたく結びついた三部作をなしているという事実は，今では定説と化し，刊行に際しては三者を切り離すことなく抱き合わせの形で編集するのが望ましいとされている[1)]。『作り話』と『夫人』でとりあげられた男女の性愛と結婚，さらにそれをめぐる社会道徳や制度や宗教といったテーマが，『ブーガンヴィル』にいたってより包括的で巨視的な文明論の観点から論じられる，といった具合である。何よりもディドロ自身が三作相互の連関を強く意図しており，たとえば『夫人』末尾で星空の下を帰途につく二人の対話者が，翌日ふたたび出会うところから『ブーガンヴィル』が始まることからしても，どちらかといえば最近になって認知された感のあるこの解釈の正しさは明らかであろう。

それにもかかわらず私が本論で第二作の『ラ・カルリエール夫人』のみをとりあげ，独立した短編として論じるのは，三部作という統一体の中で『夫人』が占める位置を測定するために，まず内容と形式の両方からこの作品を作品たらしめている独自な姿を見届けておきたいと考えるからである。

ディドロの著作に多少なりとも親しんでいる読み手にとって，『ラ・カルリエール夫人』は比較的論じやすいテクストに見える。ラ・カルリエール夫人とデロッシュの恋愛・結婚・破局，および二人の生き方の是非をめぐって沸騰する世論——これがテクストの最低限度の物語性を保証している内容である。物語の素材(たとえば男女の性愛)はディドロにおなじみの主題であり，それについて言及している研究書にも事欠かない[2)]。物語の枠組みとなる形式の方は対話体ということで，二人の人物の一方が他方にラ・カルリエール夫人の悲劇を語り聞かせる体裁をとる。ディドロの愛用した対話形式となれば，これまた幾多の批評家がつとにその重要性を指摘してきたところである。内容と形式のいずれから考えても，『ラ・カルリエール夫人』は三部作の残り二作のみならず，ディドロの全作品に顕著に認められるいわば「ディドロらしさ」なるものの識別要素にいとも容易に還元され，本来備えているはずの個性や特徴が見失われてしまう危険をはらんでいるといえる。

このような危険を回避し，どこまでも『夫人』をして『夫人』を語らしめるために，私は一つの仮説を援用したいと思う。そして，その仮説を構成している主要概念のモデルを，あらゆる点で『夫人』という短編小説とは隔絶した次元に属する『百科全書』の項目に求めてみたい。啓蒙主義のすべての著作と同じように，ディドロのどれほど小振りな文学作品といえども，特定の読者を対象にしたあるメッセージを秘めている。そのメッセージは，たとえば『ラ・カルリエール夫人』の場合，「対話体」という容器に盛られた「男女の性愛をめぐる論議」である，と片づけてしまえるほど単純なものではない。メッセージは一見複雑をきわめたテクストの構成を隠れ蓑にして，読み手のすぐ眼の前にありながら，容易に解読を許さない。私が『百科全書』を使って一つの仮説を立てるのも，このメッセージの抽出作業にあたり，『夫人』という短編をめぐってこれまで倦むことなく反復されてきた読みの定型から自由になりたいという気持が強いからなのである。

『ラ・カルリエール夫人』とは，伝達行為の信憑性という問題を徹底し

て追求した文学作品である——これがひとまず私の提出したい仮説である。あるメッセージを秘めた作品が，みずからメッセージの真偽を問うている。この，蛇がおのれの尾を噛むような，自縛と円環の構造が『夫人』一編の本質的特徴であるといえる。ところで，『百科全書』の項目中，伝達行為の信憑性をまともにとりあげたものは二つある。《確率》Probabilité と《話における権威》Autorité dans les discours である[3]。

項目《確率》は八ページにわたる長大なものであり，その大半はベルヌーイやドパルシューの確率論に依拠した純然たる数学的記述だが，確率計算が対象とする人事一般のいわゆる「蓋然性」をめぐって，「証言の価値」なるものを問題にする。ある事件なり事象なりについて述べ伝える証言は，いかなる規準にもとづいてその真偽の度合を確定しうるか，というのである．項目《確率》が挙げている規準は「数」および「信用」の二つである。「数」は証言それ自体の多寡に関わるもので，同一の内容をもつ証言が多いだけその信憑性は増すことになる。一方，「信用」は証言する人間に関わり，当人の「能力」(知識や判断に誤りがないかどうか) と「廉直」(嘘をついていないかどうか) とが過去の実績に照らして問われなければならない。

項目《話における権威》はディドロ自身の手になるものと言われている[4]。ディドロは項目「確率」で提出されている証言 (＝話) の判定規準のうち「数」の方には重きをおかず，もっぱら証言者に対する「信用」をしきりと強調する。

「話における権威とは，発言内容を信じてもらえる権利というほどの意味である。だから話を信じてもらえる権利があればあるほど，権威があることになる。この権利は話し手に認められる知識[＝能力]と誠意[＝廉直]の度合にもとづくものである。知識は間違いを防ぎ，無知から生じる誤謬を退ける。誠意は他人を騙すことを防ぎ，悪意で信じこませようとする嘘を抑止する。それゆえ知識と誠実こそが，話における権威の本当の尺度となるのである」

さらにディドロは聖アウグスチヌスを引用しながら，知識と誠意とは語

り手の「真価」に関わるものであるが，その人が特定の団体に属していたり，党派の支持を受けているような場合は，その人の評判だけから真価を判断してはいけない，と述べている。話の主題をなす内容それ自体とその人の話とを正しく比較することだけを，試金石となすべきなのである。

以上，『百科全書』の二項目を通覧して驚かされるのは，証言や談話の真偽の測定をめぐって提出されている基準——とりわけ話し手の「信用」を左右する「知識」と「誠実」とが，通常「フィロゾフ」と呼び慣わされている啓蒙哲学者たちがおのれに課している条件と完全に符合していることである。『百科全書』の項目《哲学者》Philosophe が挙げているフィロゾフの特徴三つのうち，「観察力」と「判断力」とはディドロのいう「知識」に当てはまり，三つ目の「社交性」はむしろ哲学者の道徳的資質として「誠意」と重なりあう[5]。話すこと自体において，人はすでにフィゾロフを成立せしめる根本基準によって判定されるのだ。では以上の事情は『ラ・カルリエール夫人』という作品の中で，どのような形の展開を見せるのだろうか。

———————— ∘ ————————

『ラ・カルリエール夫人』を含むディドロの三部作は，いずれも対話体の作品である。そのうちで，何組もの対話者を登場させているのは『ブーガンヴィル航海記補遺』であるが，全体の運びの狂言回しをつとめる A および B という人物が，他の二作では匿名で対話しているカップルに相当すると思われる。『これは作り話ではない』と『ラ・カルリエール夫人』の場合，対話者は匿名とはいえ一応の役割分担ができていて，『ブーガンヴィル』で B に当たる人物が語り手をつとめ，A が聞き手の役に甘んじる。本論では記述の便宜上，『ブーガンヴィル』に倣って二人を A および B という名で呼ぶことにするが，実をいえば作中人物が匿名であるというこの奇異な設定こそ，『夫人』(とそして『作り話』)という作品の，読み手をまず最初に驚かす特徴である。

「——帰ろうか。

——まだ早いよ。

——あの雲が見えるだろう。

——心配無用。ひとりでに消えるよ，風なんかそよとも吹かずにね[6]」

こうして『ラ・カルリエール夫人』は天気をめぐっての一見他愛のないおしゃべりから始められる。前置きもなしに，正体不明で匿名の人物の会話を聞かされる読み手は，はたしてどのような位相に置かれるのだろうか。いうまでもなく，自分が手にしている作品(＝話)の真偽について蓋然性をまったく確定しえない宙吊りの位相である。読み手は不安を感じ，本を閉じようとする。とその時，読み手は自分が感じたばかりの不安が，そっくりそのまま，対話者の一人のセリフとなってテクストの中に写しとられていることに気づく。「帰ろうか [……] あの雲が見えるだろう」 この頼りない人物を A と名付けよう。A はディドロがテクストの中に誘い込んだ読者その人であり，この作品が発信するメッセージの信憑性について，飽くまで作品の中で吟味し，判断を下す存在にほかならない。対話者 B の話に耳を傾け，つねに受け手の役割に甘んじているのがその証拠である。

ところで，A が黒雲を仰ぎ見て雨を心配し，帰宅を急ごうとするプロローグは，短編小説の冒頭によく見受けられる自然描写の一種とは考えられない。B は A を引き留め，黒雲は間もなく姿を消して晴れ間が見えるようになるから，すぐ帰るには及ばないと言う。B が A を説得するために援用する論理は，すでにそれ自体が見事な哲学者の推論である。『百科全書』による「フィロゾフ」の定義をむしかえせば，事象の正確な「観察」があり(「ぼくは夏の暑い時によくそれを観察したことがある」)，ついで適切な「判断」がくる(大気が雲の水分を吸収した結果，空は澄明になる)。言いかえれば，話し手 B の「証言」には，聞き手 A の「信用」をかちえるだけの「能力」(＝「知識」)が認められるのである。ことは人事でなく自然に関わるものであり，しかも当事者の眼前で生起する現象であるから(「いや本当だ，君がしゃべっている間，見ていたら，まるで君が命令したみたいな現象が起きたぜ」)，B の証言にことさらに「廉直」や「誠意」を

求める必要はない。項目《話における権威》でディドロが言うところの「知識」の条件をBが満たしていれば，Bは「話を信じてもらえる権利」，すなわち「権威」を有することになる。

明らかにディドロはこの二ページにわたるプロローグの部分で，識者Bによる愚者Aの教導という形を借りて，『ラ・カルリエール夫人』一編の正しい読み方とでもいうべきものを読者に暗示しているのである[7]。周知のように，天候に関する話は作品の末尾でも繰り返され，プロローグでBが予想した通りの星空の下を二人は家路につくという締めくくりになっている。つまり，プロローグとエピローグは作品に対していわば額縁の役割を果たしている。『ラ・カルリエール夫人』の読み手はまずこの額縁を眺め，そこに彫り込まれている二人の絵姿のうちで愚者Aに同化することによって，識者Bから自然現象の正しい読み方を手ほどきされ，額縁が囲んでいる絵の本体，すなわちラ・カルリエール夫人物語の鑑賞方法について示唆をえるのである。識者Bの指導と教育ぶりはいかにも啓蒙哲学者にふさわしいもので，黒い雲を見上げて晴れた空を予告する時の言葉えらびからして，百科全書派の面目躍如たるものがあるといえよう。

「青い点は数を増して広がってくる。じきに，君を脅かしていた黒いヴェールがどうなっちまったのかも分からなくなり，澄明な大気，晴れ渡った空，美しい陽光に目を奪われるだろうよ[8]」

暗闇から光明へ——これはダランベールが『百科全書序論』で，無知な野蛮状態から新しい啓蒙時代への移行を宣言する際に用いた基本的イメージなのである[9]。

哲学者Bがプロローグの部分で友人Aに与えた教育とは，もっぱら水蒸気や雲の発生に関する気象学の基礎知識であり[10]，この基礎知識を活用して自然現象についての「権威」ある「証言」を作成する方法であった。その際，Bはよき教育者として，広大無辺な天空の事象も，つきつめれば化学者のささやかな実験と選ぶところがないのだ，と言い添える（「実験室でやっていることが，僕たちの頭上で規模を大きくして行われているだけなんだよ[11]」 一方，Aの方もこれまたよき生徒として，Bの説明

を応用・敷衍し，雲の浮かぶ天空から人間の住まう地上へと話を下降させる。要するに，大気による水の溶解原理は，冷水を入れたコップの表面にできる水滴や，コーヒー茶碗の底に溶け残った砂糖を説明する場合でも有効なのである[12]。A は学習の過程で身につけた知識を，身辺のくさぐさに適用し，いわば人間化する。『百科全書』が哲学者の特質として挙げている「社交性」の美徳から，A はほど遠くない場所にいる。そして同時に，A はこの知識の人間化を学んだことで，『ラ・カルリエール夫人』の本体をなすあのまことに下世話で人間臭い物語を B の口から聞かされるに際しての，いわば証言聴取への心の支度を整えたのである。

———————— ○ ————————

語り手 B はどのような場所で，ラ・カルリエール夫人の身の上話を A に向かって語り聞かせるのだろうか。この点について，テクストは驚くほど寡黙である。空や雲の話からして，二人が戸外を散策しているらしいことは明白だが，「ここ」という副詞で誰か知人のサロンとおぼしき場所を示している以上は，館の庭園を歩きまわっていると見るのが妥当だろう[13]。庭園は自然と人工とのいわば緩衝地帯であって，空模様を眺めながら人事を論じあい，浮世と隣接しながら精神を自由に働かすことのできる，格好の場所だからである[14]。

さて，話の口火を切るのは A の方である。

「散歩を続けるんだったら，ひとつ教えてくれないか，君はここに来る連中を皆知ってるんだから。あのひょろっと痩せこけた憂い顔の男は誰だい，坐ったきり口も利かず，他の者が散ってしまった後もサロンに一人取り残されていたね[15]」

今しがた見かけた気がかりな人物について，A はここでもまた哲学者 B の「権威」に縋ろうとする。ただプロローグと違い，A が B に求めている「証言」は，B が哲学者として身につけている『百科全書』流の「社交性」にもとづくものである(「君はここに来る連中を皆知ってるんだから」)。B は自然科学者として雲にまつわる A の疑念を晴らしてやったよ

うに，今度は社交人士としての豊富な経験に物言わせて正確な証言をしなければならない。A がしきりと気にしているサロンの余計物は，いうならば人間化した雨雲である。過飽和状態の社交界から沈澱物として締めだされた「憂い顔」の水滴であり，砂糖である。語り手 B に課された役目は，この人物がいかにして社交界の無知と臆断から人間社会の「雨雲」に仕立て上げられたかを説明し，確実で明白な情報をもとにこの除け物にまつわる伝聞の嘘を暴いて，世論に追従する聞き手 A を真実の認識へと再教育してやることである。

識者 B による愚者 A の教育過程そのものが『ラ・カルリエール夫人』の物語を構成していることは言うまでもない。正しい証言と聴受の指南が行われる場は，曇り空が星空へと移行しつつある黄昏時の庭園であり，社交人士の笑いさざめくサロンの明かりがおそらくは二人の目と鼻のところで瞬いているはずである。筋書はいたって単純ながら，物語の構成は複雑をきわめていて，ディドロのいわゆる「語りの戦略[16]」なるものがどれほど巧妙に仕組まれた言葉の魔術であるかが痛感される。主人公の男女の身の上を語りながら水平方向に進行する筋の展開は，実のところ私たち読み手の期待を最小限度満たすための仮初の物語であるにすぎない。つぶさに吟味すると，エピソードの一つ一つに関して，さまざまな伝聞や解釈を塗りこめた垂直方向の分厚い言葉の柱が次々と立ち並び，読み手が受信するメッセージの「権威」をその都度打ちこわして，物語それ自体の存立を危ういものにしているのである。本論ではそうした多重性をもつテクストを三つの層に大別し，それぞれに含まれる「証言」の信憑性，すなわちディドロが言うところの「知識」と「誠意」の度合を測定したいと思う。三つの層とはすなわち，男女二人の作中人物の層，ついで二人を論評する伝聞と世論の層，最後に以上の二層を相対化する対話者 A と B の層である。

———— ◦ ————

作品の冒頭でサロンの客が仲間外れにしている男，シュヴァリエ・デロッシュと，その妻ラ・カルリエール夫人には，意外な共通性が認められ

る。二人は旧体制下のフランス社会で「権威」として機能している組織や制度と関わり，往々にしてその犠牲となっている。たとえば家族について見ると，デロッシュは「吝嗇な父親[17]」をもち，「次男坊[18]」の境遇に甘んじて聖職者になるが，やがて教会から法曹界へ転じたため一家眷族の顰蹙を買う[19]。ラ・カルリエール夫人は，強欲な両親の強制で老人と結婚させられ[20]，夫の死後はその遺族と訴訟に入る[21]。教会を捨てて裁判所に入ったデロッシュと同様，夫人も結婚に際しては神の前での誓約よりも，縁者・知人で構成された「法廷」での契りを重視する[22]。二人はいかにもディドロ好みの，一見風変わりな，規格を外れた，横紙破りの人間なのである。デロッシュはディドロが微妙な牽引と反撥を覚えつづけた「リベルタン」の特質を有する男であるし[23]，ラ・カルリエール夫人は長編小説『宿命論者ジャック』に登場する，あの美しくて残酷なラ・ポムレー夫人の面影を宿している。

しかしながら，もとよりこの短編作品の狙いはそうした強烈な人物像を読者にアピールすることにはない。二人が世人の口の端にのぼり，あれこれ取り沙汰されるにふさわしいだけの話題を提供するような人間であることが必要なのである[24]。

今少し子細に二人の作中人物を検討してみよう。世人の好奇の眼に晒される以前に，彼らはすでに「証言」，「判断」，「風評」といった一連の主題系に深く関わる人間として描き出されている。その点でデロッシュの高等法院時代のエピソードは注目に価する。刑事交替法廷で報告官に任ぜられたデロッシュは，書類吟味の上被告に死刑の判決を下す。死刑執行直前に，囚人はデロッシュに向かい，自分の有罪を認めながらも(「神よ，汝の裁きは正しい」)，デロッシュの推論がまったく不当なものであることを理路整然と証明する。「証拠に確実さもなく，判決に公正さもない……[25]」項目《話における権威》でのディドロに従えば，死刑囚の言う「確実さ」とは話の信憑性を保証する二つの条件のうちの「知識」に相当し，「公正さ」の方は二つめの条件である「誠意」に当てはまる。すなわち報告官デロッシュは，被告について何の「権威」もない「話」を作成したことにな

る。このエピソードは一種の伏線となって，のちにデロッシュがやむをえぬ浮気を妻に見つけられて，公衆の面前で有罪の判決を受ける場面に裏返しの形で復活する。杜撰な判決を下した当人が，今度は「世論」というこれまた良い加減な法廷で被告席に立たされるのだ。いや，評定官の時期ばかりではない。ラ・カルリエール夫人との結婚生活においても，デロッシュは妻の心の動きを読みとることのできない呑気な亭主として描かれている。昔の愛人との密通を夫人に見破られている事実に気がつかないばかりか，彼は傷ついた妻が時折り見せる失意や絶望の兆候を気鬱症で片づけて済ませてしまう[26]。評定官としてのみならず，デロッシュは夫としても判断に「権威」がないのである。

ラ・カルリエール夫人の方はどうか。夫人もまた物事の外見に欺かれやすい弱味を露呈する。最初の夫との結婚に対する稚拙な幻想がそうだし[27]，親戚・知人の面前でデロッシュに貞節を誓わせ，自分の美辞麗句の効果を信じて疑わない慢心ぶりがそうである[29]。だが，ひとたび夫に裏切られたと知った瞬間から，夫人はおのれを存在と外観に分裂させ，他人を欺く女性，すなわち隠すべきものを隠し，示すべきものを示して，自分に関する「権威」ある「証言」を他人に強要するような存在へと変身する。彼女が公衆に向けて提示する資料は否定しようのない，明々白々な証拠ばかりである。衆人環視の中で夫の不貞を告発する際は，伝聞ではなくて歴とした手紙が回覧される[29]。デロッシュとの別居を宣言してのち，ラ・カルリエール夫人は財産の殆どを夫に残し[30]，いわば身一つで子供を連れ母の家に移り住む。以後，夫人の夫に対する復讐の武器は，財産のみならず，世間や他人に提出する資料を極度に切りつめ，いわばあらゆる自己主張を無化しておのれの属性を剝奪し，最後に残された「肉体」という，誰の眼から見ても彼女の意識や邪心が介入しえないはずの絶対の証拠を楯にする方法であった。こうして彼女は，三人の身内を次々と道連れにしながら[31]，おのれの肉体を消耗させ[32]，おそらくは自分自身でも気づかぬうちに[33]，「死」という最強にして最後の切り札たる証拠物件を手に入れる。結婚に際しての永遠の貞節を神の前ではなく[34]俗衆の前でデロッシュと誓いあっ

たカルリエール夫人が，死に場所として神の家である教会を選んだのは興味深い事実である。この唐突な悲劇を目のあたりにした信徒たちは，こともあろうに司祭に唆されて激昂し，デロッシュをリンチにかけようとする[35]。夫人が終始神と教会すらをも手玉にとって利用し，自分についての証言に「権威」の重味を加えようとしていたことは明らかである。その意味でラ・カルリエール夫人は，本人の自覚の有無を問わず，『危険な関係』のメルトゥイユ侯爵夫人からほど遠からぬところにいる[36]。

視点を変えて，夫人とデロッシュの関係に別な光を当ててみよう。二人の結婚生活はなぜ破綻したのだろうか。デロッシュは独身時代から派手な女性遍歴と世人の意表をつく職業がえのため，「移り気」の化身のような存在として描かれ[37]，ラ・カルリエール夫人もその「無貞操という評判」[38]が心配でなかなか結婚を承諾しない。夫人はデロッシュとの「数年間にわたる親交[39]」にもかかわらず，前夫との辛い生活が身にしみているせいか，自分自身の眼と判断よりも世論の「証言」に信を置いているような節さえある。ところが見方を変えると，デロッシュの「移り気」は飽くまで表面のもので，彼はそれなりに一貫性があるという考え方も成り立つ。女遊びは「官能への嗜好が強い」[40]という自然の体質がなせる業だろうし，二度にわたる転職にも語り手 B が「気骨[41]」と称えた立派な理由がある。ただデロッシュの体質やモラルは必ずしも一般社会の規範に一致するものではないから，彼の「一貫性」は世間の「証言」に説得性のある資料を提供しないということなのだ。

ラ・カルリエール夫人はデロッシュに関するそうした「証言」を信じ，結婚の条件として永遠の貞節を相手に約束させる。この瞬間からデロッシュは「存在」（自然体で生きるデロッシュ）と「外観」（誓いが要求するデロッシュ）とに分裂し，世論はデロッシュが存在を外観にどこまで合致させるかで彼についての評価を決定するようになる。ところで『百科全書』の項目《約束する》Promettre にも明示されているように，約束によっては安請け合いもありうるし，それを無視した過度の要求はむしろ要求する側の精神の弱さを示す以外の何物でもない[42]。ラ・カルリエール夫人の要

求はたしかに常軌を逸した異常なものである。夫人はこの異常性を正当化し，それについての認知をえるために身内や知人を利用する。自分に好意的な気運を醸成し，永遠の忠誠という神話を発生させる場として，彼女は大規模な芝居仕掛を工夫し，伝染性をもった熱狂の渦に観客を巻きこんで，彼らの「証言」に「感動」という否定しようのない「権威」の箔をつけるのである[43]。

デロッシュの「不貞」は，夫人と世論とから期待されている地平——「誓約」の地平——とは異なった次元に姿を現わした二つの現実問題に端を発している。一つはデロッシュの「自然」であり（夫人が子供の離乳まで夫との交接を拒んだための欲求不満[44]），今一つは例の「気骨」である（友人を窮状から救うために昔の愛人と縒りをもどした）。これはむしろディドロ好みの「良心の問題」cas de conscience として検討されるべきケースなので[45]，存在と外観との食い違いに悩むデロッシュと，両者を飽くまで同一化しようとするラ・カルリエール夫人との間には，越えようのない溝が横たわっている。

———————— ○ ————————

『百科全書』の項目《意見》Opinion によると，意見とは「一瞥しただけでは真実と思えないような命題に精神が与える同意」である[46]。むろん，この同意はある程度の判断や推論を経てはいるが，常に一抹の逡巡を伴うものであることはいうまでもない。ましてやある「意見」が人々の口から口へと伝達され，波及の圏域を拡大して形成する「世論」opinion publique において，「話における権威」が弱まっていくのは必定である。『ラ・カルリエール夫人』のテクストを構成する第二の層では，二人の男女の生活や行動をかまびすしく論評する俗衆のさまざまな声が聞かれ，それらが流布・伝播していく過程でいつしか巨大な「世論」の斉唱となって響き渡る有様が描かれている[47]。

まず，事件の場に居合わせた人々（たとえば結婚前日のラ・カルリエール夫人の長口舌を直接聞いた身内や知人）による「証言」の作成がある。彼

らはいずれも「感動」という抗いようのない情緒的「権威」に追従し，一体感の幸福に酔い痴れて満場一致の「意見」を採択するのである[48]。次の段階で「意見」は「情報」に変質する。ここではおのれの見解や思想を持たぬ俗衆が，他人の意見を無批判に受容し，かつ模倣・反復する。デロッシュが聖職を捨てて高等法院入りをした時，家族の非難の声に唱和した公衆[49]，失意のラ・カルリエール夫人に面会謝絶を食った「お偉がた」の尻馬に乗って夫人を中傷した人々[50]，夫人の遺体の前でデロッシュを告発した司祭に唆されて暴徒と化した信者たち[51]——こうした手合いはそれぞれ「家庭」，「名士」，「教会」といった社会的権威に追随する形で情報を判断し，いわゆる「風評」を作りあげる。風評はさらに伝播して，たとえばAのような遠隔の地にいる人間の耳にまで達するのだ[52]。

もっとも，『ラ・カルリエール夫人』でディドロが追求している「意見」の伝達経路はけっして誤解が誤解を生むだけの単線的なものばかりではない。夫人によるデロッシュの糾弾の直後，人々の反応は曖昧であり，少なくとも現場の証人たちは是と非の間を揺れ動きながら，判断を保留していた節がある[53]。デロッシュと別居してからの頑迷な態度で夫人の人気は下降するが[54]，たちまちそれとバランスをとるような形で夫人弁護の声が湧き上がり[55]，やがて夫人が子供，弟，母親と三人の身内を相次いで失うに及んでデロッシュ断罪の世論が大勢を占めるのである[56]。よく読めば明らかなように，ディドロには世論の無定見を一方的に論難するような短絡思考はない。むしろ，付和雷同組と懐疑論者，そして良識派をほどよく組み合わせ，それらの確執や拮抗の中から「世論」という怪物が立ち現われるところに，現実社会のメカニスムを見定めていると思われる。

———————— ◦ ————————

第三の層，すなわち対話者 A および B の声が聞こえる層は，伝達行為の信憑性という観点からして，誇張なしにこの作品それ自体の死命を制する重要な役割を担っている。というのも，作品全体が一分の隙もなく二人の会話の言葉で塗り固められている以上[57]，会話の主導権を握っている

語り手Bの「知識」や「誠意」が少しでも疑われるようなことがあれば，Bの口から伝えられる情報のすべて（すなわち第一層と第二層に関する証言）は一挙にその「権威」を失うことになりかねないからなのである。Bの話はどこまで「信用」できるのだろうか。

私たち読者の立場をいわば代弁しているAは，プロローグ以来，Bという友人に人間的信頼を抱いていることは確かである。「君が僕に言うんだから，信じるよ[58]」Bは Bで，自分の話が作り話ではないことを証明するために，ラ・カルリエール夫人との親しい間柄をほのめかしたりする[59]。だが，Bはデロッシュ弾劾の肝心の場には居合わせず，夫人の母のところで彼女の到着を待っている[60]。従って，デロッシュを糾弾する夫人の演説は正しい記憶によって再現されず，不正確な伝聞の形をとる。「その時，ラ・カルリエール夫人は立ち上がって一同に向かい，次のようなこと，もしくはほぼ次のようなことを言った[61]」。ところが，Bの話は言伝に聞いた情報にしては細かい描写や記述が豊富に盛り込まれすぎており，明らかに間接情報に編集の手を加えていることが見てとれる。『百科全書』の項目《確率》によれば，そうした「編集」作業，すなわち証人の「明晰かつ詳細に語る」能力も証言の信憑性を決定する要因の一つであると考えられている[62]。ただし，この項目の執筆者が「証言」という言葉で理解しているのは，ある事件の直接の目撃者が語り伝える話のことなのであって，Bの場合のように人伝てに聞いた情報をさらに加工するとなると，これはむしろBがしきりと論難する俗衆の流言浮説と選ぶところがなくなってしまう.

『ラ・カルリエール夫人』のテクストが抱え込む最大の問題がここにはある。語り手Bは果たしてフィクションの援用を許されるのか，という問題である。この場合「フィクション」とは，根も葉もないことを語って嘘をつく意味ではなく，いくつかの手掛り（観察や伝聞）をもとにして状況の全体を正しく復原するために必要な手段を指している。プロローグでBがAに開陳した雲の発生と消滅に関する科学理論は，二人が現に仰ぎ見ている空で生起する現象を踏まえての，いわば明証的事実に関する理論で

あった。そこでの B はすぐれた哲学者として推論し，A を啓蒙したのである。だが，テクストの本体をなすラ・カルリエール夫人事件について報告する B は，記憶と伝聞にもとづく蓋然的事実に関する推論を行なっている。B は聞き手の A を納得させるために，哲学者として語る(流言飛語のメカニスムを例証を挙げて正しく解明する) と同時に，詩人としての想像力を駆使して事件全体の正しい再現 (事件があった通りにではなく，あったであろう筈の形に再構成する) を行なわなければならない道理である。ディドロはこうした「哲学者」と「詩人」の違いを『劇作論』で明確に定義し，両者の営みが「自然」を媒介にして基本的には深い類縁関係で結ばれていることを強調している。

「イマージュが自然の中に継起する通りの，必然の連なりを思い浮かべること，これは事実によって推論することである。しかじかの現象が与えられれば，イマージュが自然の中に必然的に継起するであろうような連なりを思い浮かべること，これは仮説によって推論すること，ないしは仮想することである。つまり定める目的次第で，哲学者にも詩人にもなるのである。ところで，仮想する詩人と推論する哲学者とは，どちらも同じ意味において，首尾一貫していたり，いなかったりする。というのも，首尾一貫していることと，現象の必然的連鎖の経験をもつということとは，同じことだからである[63]」

語り手 B は，事実の忠実な再現ではなく，「現象の必然的連鎖」の詩的表現を目指すことになる。当然のことながら，B の努力はその語りくちの文体上の工夫となって表われる。B が物語の重要な結節点で「時」を表わす接続詞 lorsque, 副詞 alors を多用しているのは，そうした工夫の一つであろう。「デロッシュと同僚が煖炉の前に坐っていると，その時受刑者の到着が告げられた[64]」 これはデロッシュが高等法院評定官辞任を決意した決定的なエピソードの開始を告げる一文である。以下，この定型はラ・カルリエール夫人の大演説[65]，デロッシュ告発の日の到来[66]，デロッシュの書斎への夫人の入室[67]，夫人の告発開始[68]，といった具合に畳みかけるようなリズムで間隔を次第に狭めながら反復され，物語全体をいくつかの

エピソードの連鎖として構成する役割を果たしている。

また直接話法の頻出（ラ・カルリエール夫人の二度にわたる長広舌や社交人士たちの噂話など）は，B の話に「証言」というよりは事件現場からの実況中継といった趣を与え，言葉を発語されたままの形で，発語者についての反省的・分析的情報なしに A の耳に受信させるから，A は事件について又聞きではなく，あたかも現場の証人のような確信をもつのである。こうして，聞き手を生まな言葉そのものの発語の場に立ち会わせようとする「語りの戦略」は，当然のことながらテクストの中から可能な限り固有名詞を消し去ることになる。『ラ・カルリエール夫人』の中で，名前をもっている人物は主人公の男女二人だけである。彼らの身内はただ「父」であり「母」であり，「弟」や「子供」であるにすぎない。それ以外の人人は，せいぜいよくて「同僚」や「お偉がた」であり，「司祭」と呼ばれるのが関の山で，殆どの場合は不定代名詞の on で括られ，夫人とデロッシュを囲んで無責任な風説を流しつづける匿名の声の集団として扱われている。声の主が特定されると，声が運ぶ証言内容についての判断が，それがために制約されてしまう危険が生じてくるのである。

聞き手の A は，B の物語る事件の前後に外国にいたという事情も手伝い，無知と臆断の格好の見本として登場する。もとより A にとって二人の主人公は未知の人物ではないし，二人の事件そのものも巷間の噂で知らない訳ではない。だが少なくとも作品の前半において，A は俗衆と少しも変わらず，判断において自主性がなく（「実は白状するが，僕はデロッシュのことを皆と同じように判断していたよ[69]」），また推論において凡庸である（デロッシュの浮気についていかにも社交人らしい詰らぬ想像をめぐらせる）[70]。つまり A は「世論」や「常識」という「権威」に追従するだけの人間なのである。B による A の「教育」は会話のやりとりを通じて如実にその効果を表わしはじめる。B の話に気の利いた格言風の注釈を差し挟むのがその徴候で，これはつまり A が事件の全体を一つの物差しで計ることができるようになったことを意味している[71]。彼は B の先を越して話の筋を見事に予測してみせるし[72]，B と二人で一つの命題をリレー

式に陳述できるようにまでなり[73]，ついには独力で一つの仮定を立て，ラ・カルリエール夫人が今少しまともな女性であった場合の円満な解決法まで示唆してみせるのだ[74]。知者 B が愚者 A に与えるこの啓発と感化が，プロローグでの空を仰ぎ見ながらの「事物教育」をモデルにしていることはいうまでもない。

———————— ○ ————————

第三層の A および B による対話を通じて主張されているのは，つまるところどのような思想だろうか。B の「証言」は往々にして主観性の強いもので，無節操・無定見な世論への感情的な攻撃の言葉が次々と飛び出してくるばかりか，対話者 A にまで八つ当りをする[75]。ラ・カルリエール夫人が華麗な弁舌で一座に「感動」の「権威」を押しつけたように，B は「感情」の「権威」を誇示して A の理屈抜きの信用を獲得する。作品の末尾の方でついに俗衆の偏見を「無数の邪悪な頭と同じだけの舌をもった卑しい獣」と決めつけた語り手 B は，それではこの作品の核をなすデロッシュの浮気という行為をどう考えているのか。B は浮気そのものと，浮気がその後引き起したさまざまな波紋とを厳密に区別する。デロッシュが昔の愛人と縒りを戻したのは，友人のために一肌ぬごうという殊勝な気持からである以上，「友情，誠実，善行[76]」といったデロッシュの善意が浮気の要因として強調される。考えてみれば，デロッシュは結婚前にもラ・カルリエール夫人への「友情」から彼女の訴訟に介入し，評定官という過去の職業を利用して根回しにつとめている。問題の浮気はそのパターンの繰り返しであって，「過去の職業」が「過去の女性」に摩り替わっただけのことである。だがそうした側面からの弁護の声はかしましい世論の中から一度も聞こえない。

B によるデロッシュ擁護のもう一つの主張は，浮気以後の彼の不幸がすべて「偶然」，「運命の気紛れ」によるものだという説明である。浮気それ自体からして何ら自主的なものではなく，夫人と同衾できない欲求不満のデロッシュに造化の神が仕掛けた悪戯であるが，それ以上に浮気の発覚に

しても(召使が手紙の箱を落とした)，夫人の身内が次々と三人も死んだことにしても，夫人の遺体運搬の現場にデロッシュが通り合わせたことにしても，すべてが悪意ある世論という「卑しい獣」にとっては格好の餌となるような不測の事態だったのである。その意味で，デロッシュは「運命の気紛れと人間の無分別な判断との何とも気の毒な犠牲者の一人[77]」なのだ。この物語の内容に則したレベルでの B の結論は意外なほど平凡である。「浮気な亭主の肩をもつ訳ではないが，[貞節という] あの珍しい美点をあれほど後生大事にする妻を，僕はたいして評価しないね[78]」。

この主張は良識と経験に支えられたまろやかな世間知の声であって，そのまま受け取れば旧体制下の貴族社会に流通していた放縦是認の風潮に迎合する，身勝手な表白とも読めかねない。B の主張が秘めている思想の正しさを保証してくれるものは，これ以上テクストの中を探しても見つからないのである。これはディドロが語り手 B に托している思想が，社交界という限られた場で，しかもラ・カルリエール夫人とデロッシュなる想像上の人物をめぐって展開する架空の物語の枠内に押し込められてしまっているがゆえの，いわば「フィクション」に固有な限界であると考えられる。B が聞き手の A を説得しようとして語りくちに工夫を凝らし，「語りの戦略」をいくら精緻に磨き上げても，それによって A が合点するものはどこまでも事件を構成する「現象の必然的連鎖」の実体と，事件に対する B の判断の妥当性であるに留まり，A はそうした「連鎖」や「判断」について世俗を超えた次元から展望し，観想する視点をついに持ちえない。語り手 B がそのような展望についての「証言」を発語しようとすれば，彼は自分が設定した「フィクション」の枠を打ち破って，自分の物語の外へ飛び出してゆかざるをえない。作品末尾で，この「超出」は二つの方向に試みられている。その一つは飽くまでテクスト内に留まるものではあるが，B の「証言」が過去の事件を対象にすることを止めて，未来を予測するところに認められる。「いずれ，こいつ [世論という化物] にも常識が戻って，未来の談話が現在の饒舌を訂正するだろうよ[79]」ディドロ好みの「後世」の観念がこうして姿を現わし，B の「証言」は未来に仮設され

た「談話」の中にみずからの「権威」の保証をもつことになる。

二番目の超出は，文字通りこの『ラ・カルリエール夫人』のテクストそのものの乗り超えである。Bは作品の結末でこんなことを突然言い出す。

「僕はある種の行為について自分なりの考えがあるんだ。たぶん正しいとは思ってるんだが，他人には間違いなく奇妙なものに思えるだろうね。その行為は人間の悪徳というよりは，不合理な法律が生み出した結果であると思うんだ。この不合理な法律って奴はね，法律に劣らず不合理な風習を作り出し，人間のせいとしか言いようがない堕落を生じさせる。これだけじゃあ何のことか分かって貰えないだろうが，別な機会にはっきりさせるよ[80]」

この部分の言明は，あまりにも唐突で，しかもそれまでBの「証言」に陰も形もなかった社会制度に対する批判の思想が兆しているという点で，私たち読み手を驚かす。テクストの第三層に鳴り響いていた哲学者の声（すなわちあの『百科全書』流の「知識」と「社交性」がほどよく調和した穏健な啓蒙哲学者の声）を突き破るようにして，より荒々しくも剣呑な第二の声が語り出すからである。B自身はおのれの裡に眼を覚ましたこの新しい声に対して責任をとりきれない。当然のことながら，彼は自己検閲の手段に訴えて（「これだけじゃあ何のことか分かって貰えないだろうが」）発語のスイッチを切り，テクストに他の作品へと通底する穴を穿って作品そのものを相対化してしまう（「別の機会にはっきりさせるよ」）。

語り手Bがついに「はっきりさせる」ことのかなわなかった危険な思想とは，デロッシュの不貞もラ・カルリエール夫人の悲劇も，二人をめぐる社交界の風評も，つまりは人間社会の一切の事象と事象に関する証言とを無に帰してしまうような「自然」の声が語る思想である。いうまでもなく，Bが言う「別な機会」とは，ディドロの三部作を締めくくる『ブーガンヴィル航海記補遺』のことであり，対話者AとBは新しい対話の場をえて，『ラ・カルリエール夫人』の第三の層が行き詰った地点から，今度はタヒチという「フィクション」を媒介にした「自然」思想を語り始めるのである。

注

1) たとえば現在刊行中の『ディドロ全集』で短編作品に当てられた巻を担当しているジャック・プルーストの「序文」。この巻は現在なお未刊であり，「序文」と「注」のタイプ手稿のコピーをわざわざフランスから送って下さったプルースト教授に深い感謝の念を表明したい。
2) Jacques Proust: *Diderot et l'Encyclopédie*, Armand Colin, 1962, 295-340.
3) Article « Probabilité », *l'Encyclopédie*, t. XIII, 393-400. Article « Autorité dans les discours », *ibid.*, t. I, 900-901.
4) Jacques Proust: *L'Objet et le texte*, Droz, 1980, 207.
5) *L'Encyclopédie*, t. XII, 510-a et b.
6) Denis Diderot: *Madame de La Carlière*, Notes par Y. Sumi, Hakusui-sha, 1986, 4-1. [ディドロ『ラ・カルリエール夫人事件』, 鷲見洋一編, 白水社, 1986] 以後のこの作品に限り，行数表記のある上記の教科書 (M. C. と略記) を使用する。数字は 4-1 とある場合，当該個所の冒頭が 4 ページ第 1 行目であることを示す。なおこの教科書の底本として使用したのは次の版本であることをお断りしておく。Diderot: *Le Neveu de Rameau et autres textes*, post-face de Jacques Proust, Librairie Générale Française, 1972 (Collection Livre de Poche).
7) ロバート・ダーントンはルソーが『新エロイーズ』の序文の中で読者に対して似たような指示を発し，読者を遠隔操作しているという事実を指摘している。Robert Darnton: *The Great Cat Massacre*, Basic Books, 1984, 227-235.
8) M. C., 4-17.
9) *L'Encyclopédie*, t. I, XXXIII.
10) この部分はすべて化学者ル・ロワの執筆になる『百科全書』の項目《蒸発》Évaporation を下敷にしている。*Ibid.*, t. VI, 123-130.
11) M. C., 4-15.
12) *Ibid.*, 6-11, 6-17.
13) ジャック・プルーストは『ラ・カルリエール夫人』を含むコント群と『1767 年のサロン』について比較研究を行ない，「散歩」の場所と意味に関する興味深い指摘をしている。Jacques Proust: « Le *Salon de 1767* et les *Contes:* Fragments d'une poétique pratique de Diderot », *Stanford French Review*, VIII, 2-3, Fall 1984, 257-271.
14) 周知のように『ラモーの甥』のプロローグでは，パリのパレ・ロワイヤル公園が語り手の内部(夢想)と外部(娼婦)との相渉る特権的な場になっている。
15) M. C., 6-22.

16) 鼎談「ディドロ——この未知なる人物」の中のジャック・プルーストの発言。『思想』, n° 724, 1984年10月号, 18ページ。

17) M. C., 8-10.

18) *Ibid.*, 66-9.

19) *Ibid.*, 8-22.

20) *Ibid.*, 16-23.

21) *Ibid.*, 20-7.

22) *Ibid.*, 32-20.

23) *Correspondance*, t. III, éd. Georges Roth, Les Éditions de Minuit, 330-331.

24) 「つまり，皆から笑い者にされるのが習慣になっているため，どんなことが起きても同情して貰えないような人がいるってことだよ」(M. C., 16-9)。

25) *Ibid.*, 12-18.

26) *Ibid.*, 44-2.

27) *Ibid.*, 18-2.

28) 「ラ・カルリエール夫人はデロッシュを見詰めて言うことに耳を傾け，その話や仕草の中に彼の心を読みとろうとし，すべてを自分に都合よく解釈した」(*ibid.*, 28-23)。

29) *Ibid.*, 52-10.

30) *Ibid.*, 54-23.

31) 戦場で弾丸に当たって死んだ弟は別にしても，子供と母親の死にはラ・カルリエール夫人にも多少の関わりがある。子供の直接の死因は乳が変わったためであるし (*ibid.*, 68-3)，母親の場合も「娘の苦しみをしょっちゅう見せつけられた」(*ibid.*, 70-19) ことが死期を早めている.

32) *Ibid.*, 58-21, 66-3.

33) *Ibid.*, 76-21.

34) *Ibid.*, 34-11.

35) *Ibid.*, 76-8.

36) *Ibid.*, 36-2.

37) *Ibid.*, 8-10.

38) *Ibid.*, 20-4.

39) *Ibid.*, 18-22.

40) *Ibid.*, 36-12.

41) *Ibid.*, 10-5.

42) *L'Encyclopédie*, t. XIII, 444-445. なおジョクール執筆の項目《確約》Engagement にも同じような記述がある。*Ibid.*, t. V, 675-676.

43) M. C., 30-5.

44) ラ・カルリエール夫人は当時の貴族社会の慣わしに反して母乳哺乳を実行した進歩的な女性だが，同時に授乳期間中の性行為をいましめる俗見を信じて，夫と床を別にしたのである。

45) ディドロが愛人ソフィーに宛てた手紙の中で提起した良心の問題については，以下の拙稿を参照のこと。「ソフィ・ヴォラン書翰を読む」，『思想』，n° 724, 1984年10月号，78-80。

46) *L'Encyclopébie*, t. XI, 506.

47) この風評伝播のメカニスムを悪用しようと考えたのが，ボーマルシェ『セヴィリアの理髪師』第二幕第八場におけるバジルである。

48) M. C., 30-5.

49) *Ibid.*, 8-22.

50) *Ibid.*, 62-3.

51) *Ibid.*, 76-12.

52) *Ibid.*, 48-17.

53) *Ibid.*, 60-1.

54) *Ibid.*, 62-19.

55) *Ibid.*, 64-15.

56) *Ibid.*, 72-3.

57) 三部作のうち，『これは作り話ではない』の場合は冒頭と末尾に語り手のモノローグがあるし，『ブーガンヴィル航海記補遺』はさらに複雑な多声構造を有している。

58) *Ibid.*, 18-6.

59) *Ibid.*, 42-8.

60) *Ibid.*, 58-2.

61) *Ibid.*, 50-18.

62) *L'Encyclopédie*, t. XIII, 399.

63) *De la poésie dramatique*, dans *Œuvres esthétiques*, éd. Paul Vernière, Éditions Garnier Frères, 1959, 219 (Collection Classiques Garnier).

64) M. C., 12-7.

65) *Ibid.*, 22-7.

66) *Ibid.*, 44-19.

67) *Ibid.*, 46-3.

68) *Ibid.*, 50-18.

69) *Ibid.*, 10-10.

70) *Ibid.*, 20-15.

71) たとえば，*ibid.*, 64-19.

72) *Ibid.*, 72-7.

73) *Ibid.*, 78-13.

74) *Ibid.*, 80-6.

75) *Ibid.*, 14-11, 14-13, 32-2.

76) *Ibid.*, 84-13.

77) *Ibid.*, 8-20.

78) *Ibid.*, 84-17.

79) *Ibid.*, 82-7.

80) *Ibid.*, 85-19.